

現場の獣医師からみた鶏の疾病の 発生状況とその特徴 (2)

人と鳥の健康研究所
川崎 武志

③原虫感染が関与するもの

アイメリア属のкокシジウムは種類によってそれぞれ腸の好適領域に感染していることがあります。通常は腸炎を起こすほどの増殖をすることなく静かに寄生しています。しかし、何らかの条件によって局所に異常増殖して腸炎を引き起こします。わが国において生産性に負の影響を及ぼすことがよく知られている種類のうち、とくに発病時に影響が大きくなるものとして、アイメリア・テネラ、アイメリア・ネカトリックス、アイメリア・ブルネッティがとくに重要です。これらはしばしば腸の特定領域に異常に増殖して重度の腸炎を起こすことが多く、著しく元気や食欲を失い、うすくまり、死亡や予後不良が目立つようになることがあるので注意が必要です。アイメリア・テネラは、回腸下部から盲腸にかけての領域におもに無性生殖期の原虫が粘膜深部に異常に増殖して出血性の腸炎を起こします。アイメリア・ネカトリックスは、空腸から回腸にかけての領域におもに無性生殖期の原虫が粘膜深部に異常に増殖して浮腫性～出血性の腸炎を起こします。アイメリア・ブルネッティは、空腸下部から回盲部を経て直腸までの領域におもに有性生殖期の原虫が異常に増殖し、浮腫性の腸炎を起こします。回腸の回盲部に近い部位に異常な増殖と炎症が起こる場合には、しばしば腸重積が起こることがあります。そのほかのアイメリア属では、アイメリア・アセルブリナやアイメリア・マキシマなどが異常増殖によって生産性に少なからず負の影響を及ぼすものとしてよく知られています。これらのうち、アイメリア・ブルネッティ以外の4種類については、現在、わが国においては生ワクチンが市販されており、発病コントロールに一定の効果を発揮しているように思われます。最近では、野外でしばしば発生している腸炎例においては、アイメリア・ブルネッティの異常増殖と関係しているものが割合多い印象があります。そのため、今後、アイメリア・ブルネッティについても生ワクチンの開発が期待されるところです。

ヒストモナス・メリアグリディスは、ヒストモナス症(黒頭病)を引き起こすことが知られてい

ます。その症状は、アイメリア属によって引き起こされるкокシジウム症と類似していますが、死亡個体を剖検した際に、おもに盲腸の病変が強く、チーズ状の凝固物が内腔に詰まっていたり、肝臓にまだらの壊死が認められたりすることでアイメリア属による腸炎と区別できます。

クリプトスポリジウム属の腸粘膜表面への大量寄生は、しばしば病理組織検査に際して偶然に発見されますが、この問題は直接的なことよりも、飲用水の水質に問題があることに起因していることが多いため、基本的な飼育環境整備の問題として注意をすべきです。

ロイコチトゾーン・カウレリーは血液細胞に寄生して増殖する原虫で、夏場に貧血や出血性素因などに関連する症状を示して著しい状態悪化をみることがあります。ニフトリヌカカが吸血によって媒介するので、防御は難しいです。鶏舎周囲の環境整備を行い、ニフトリヌカカの発生を防ぐことが重要です。

④内部寄生虫が関与するもの

わが国におけるこれまで主流の飼育形態では、オールイン・オールアウトや鶏舎内外の区分を明確にして飼育管理をすることを基本としてきたために、一般に鶏が直接地面と接触する機会がなく(平飼の場合は新しい敷料を用いている場合に限り)、虫卵の伝播機会が著しく少ないことや衛生管理の行き届いた品質のばらつきの少ない配合飼料が利用されることから、内部寄生虫が侵入する機会が少なく、また宿主の栄養状態が良好であることもあり、近年ではこれらの寄生

による発症の事例はあまり聞かなくなりました。しかし、鶏回虫をはじめ、線虫が寄生している例はめずらしくなく、ときに小腸に大量寄生をしている場合も見受けられます。前項で述べたヒストモナス属原虫の感染には鶏盲腸虫が関与することが知られています。いずれにしても内部寄生虫の寄生が反復して起こるといことは、とくに鶏舎内の物理的清掃状態がオールイン・オールアウト方式である場合には不完全であることや、飼育中において周囲環境から鶏舎内への持込があることが明らかです。(次号に続く)

